



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第七八号）

啓蟄 けいちつ

三月六日



白い割烹着

伊勢志摩の正月行事を取材していたら、地元的女性からご祝儀を神社の祭場へ持って行ってほしいと頼まれたことがあります。面識のない私になぜといぶかしい顔をしていたからでしょうか、女性は着用している白い割烹着をさし、「これを着けるとから、行けやんの」。お祭の裏方としてお茶を配ったりしている方でした。祭場がすぐ目の前にあっても近づくかないのです。よく見ると裏方の女性たちは皆、白い割烹着姿。日々の暮らしではほとんど見られなくなった割烹着も、冠婚葬祭という場所でのお手伝い役のユニフォームとしてまだまだ活躍していたのです。

この白い割烹着が考案されたのは1882年、明治の初め。上流階級の子女が通う料理学校で生徒たちの着物が油や水で汚れるのを防ぐため、布を身体の前と後ろにかけ、たすきで押さえたのが始まりとか。その後改良が加えられ、女子大で紹介されて、一般に広まったといえますから、ハイカラなものだったのでしょう。昭和に入ると、国防婦人会のユニフォームとなり、軍の病院での奉仕や慰問にも着用されました。また、カフェの女給はレースのフリルなどをつけ、コスチュームにしました。

私も着物の袖が邪魔にならず、汚さないからとっばら和服の上に着るくらいでしたが、近頃では機能的な部分を残し現代の暮らしに合った割烹着が出てきました。色物や柄物から、西陣の縮緬ちぢみを使ったおしゃれな上着感覚のものまであります。着てみると案外暖かく、ちょっとした外出にも便利そうです。「主婦の制服」だった割烹着も時代とともに変わりつつも、女性たちに支持され続けているのです。

文 千種清美